



76
3258
4



3258  
4

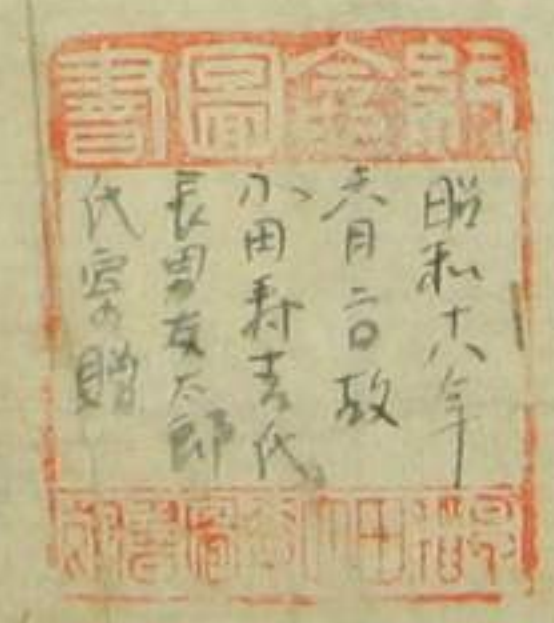
骨董集上編下之卷後



勸進比丘尼繪解

江戸

醒齋輯



下にりてせる古画の風林をりて時代を考ふる。寛永の比抄のりめりて  
 勸進比丘尼の繪解とる。体よぞあるべし。東海道名所記 浅井了意作 万治中印本 卷二云云  
 『このころら比丘尼の伊勢熊野にまゐりて祈をほとめし。その赤子みり候勢  
 熊野よまのる。その故よ熊野比丘尼と名ほ。其中よ声く。哥をうしひける  
 のゆのゆりて。うしひて勸進を。りり。その赤子まゝ。哥をうしひたり。まゝ。熊野  
 の後と名づもて。地ら。極楽まて六道乃のり。板を繪よ。あきて。終とをいじ。  
 ね。あくた。ま。女房達。寺にまゐりて。説受。ん。ご。ま。平。あ。れ。い。  
 後世をまゝぬ人のために。比丘尼のあ。されん。あ。わ。う。を。も。ま。め。たり。り。あ。あ。り。  
 ゆ。乃。あ。り。り。あ。あ。り。う。し。ひ。て。ら。満。堂。伊。勢。ま。ま。の。れ。ど。も。行。り。も。せ。ど。中。終。と。き。



○古画勸進比丘尼繪解図

柳塘館摹藏

按ざるは今よりかゝりて百八十年  
 今より前寶永中よりけりる  
 後より今より紙を白く布を  
 青にたるはあつたありて  
 七十一番職人尽の  
 後を合せてるべし



式清繪寫

あへべし。○漢土は五月五日艾もてちひさきと虎をけくまをひよりくまありそれを艾虎と  
 どり漢籍よあましくええたり和漢相似たるあり

○端午の頭巾袈裟小人形

今より元百三十年前延宝天和貞享元祿の比は五月五日男児紙を造れる  
 頭巾袈裟を着山伏の体よ出て持び一奉ありき。日次紀事 延宝 五月  
 五日の條よ云「以柳木作大小刀是謂菖蒲刀男兒横之  
 於腰著頭巾倣山伏躰云云」  
 貞享三刻「小川人家端  
 午所用木刀或謂菖蒲刀云又木長刀木甲曹山伏  
 之頭巾袈裟并藥玉等物賣之云云」  
 物類 享保十「六七十年  
 双葉まぐら五月の初どきんまぐら切けわら菖蒲刀をうりてありくそれを  
 子供求て五月四日小子供志あうぶみて疥巻しどきんをわらしたときを  
 ちまふ菖蒲刀をさうわらを吹わりく云云」とありそれらをえりてすよ  
 きべて下の古画よりととあり今もととれ小なる奉るればはげし

















○慶長年中の繪於國哥舞妓圖

原本梅龍園藏  
摸本著作堂藏

○此後三法あり。  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 ○うちをとりちうたを  
 をあびしるるの  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 ○倚子よ尻わけたる  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 又、



みどりく切りきり  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 ○念珠をさびさうけ  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 ○羅山先生文集  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の  
 一、その時の三味線の  
 二、その時の三味線の  
 三、その時の三味線の







一  
條  
院  
の  
後  
上  
東  
門  
院  
之

○酸醬を吹なうと事 [七]

今の世は女童のわづきを吹なうはいつとある事 [栄花物語 八]

いろ花の巻寛弘五年の所は「宮へうの侍は後小たつてます云

たのめ乃侍年をうらむらと小らとあはしませどいと云うぞたつては

めりさうにあらゆと心めとがたたまをさうせ給り云云侍及志ろくうら

あつちづきをどをあたぬうめとさきたらんやうみどつんえんを給

とあり當時わづきをあたうとさすのありければこそあたうらめと云ふかまけ

うらうの宮中せんごとうまきいりりもあらをあたあそがれしや寛弘五年より

今文化十年までかよを八百六年ありかる侍あつていさしもあるあつん

ありいゆらぬらぬらあり

源氏物語 此分の巻むらうのうめをいするあし「わづきとらりめめやうよふく

らりみく髪のかれるひあくうらうち不也とありとらうん吹といふけれど

榮花物語 詰のうらばよ

ありむきん似くう

枕ノ草紙 異本小「たわきよてうた物わづき」とありわづきは食物も

あつちづきをどをあたぬうめとさきたらんやうみどつんえんを給

とあり當時わづきをあたうとさすのありければこそあたうらめと云ふかまけ

うらうの宮中せんごとうまきいりりもあらをあたあそがれしや寛弘五年より

今文化十年までかよを八百六年ありかる侍あつていさしもあるあつん

ありいゆらぬらぬらあり

源氏物語 此分の巻むらうのうめをいするあし「わづきとらりめめやうよふく

らりみく髪のかれるひあくうらうち不也とありとらうん吹といふけれど

榮花物語 詰のうらばよ

ありむきん似くう

本草綱目

益小兒

附方よ云

酸漿實丸

治婦人胎熱難産

小兒をあやけよバアといふこと

恠異部むけ物又児をさうれたるをいする條よ

比比丘女

九

今童拵びよ子とらうとりの事をさめりそれのと古た事をさすの比比丘女と

りりその原の恵心僧都経文の意をとら地藏菩薩罪人をうらひえあふ

を微卒取やうんととらる作をまらるび地藏の法樂よせらほじうら始れりと





○比比丘女図

られ今わづまよとほをさる子とあ  
とりわらわの原より比丘比丘と  
の音を音はよとひふくめとつり前よ  
いふとく恵心院の傍都よりとまされり  
るればりしつたれり云

日本法華驗記 下の巻よ云  
僧都道春秋七十六  
以寛仁元年六月十日  
寅時刻永遷化矣

此ありはるの傍都の  
滅後りつりに二十  
五六年をまき  
長久中よ

撰せる物あれい  
仲とまにたれり

續本朝往生傳 十一  
元亨釈各 卷四

みも僧都の  
傳を載て入滅  
の年月日ありはよ  
享年にたれり



寛仁元年より  
今文化十年まで  
おとと七百九十七年と

○又鬼ワ〜として見を  
こりあるまねびとる  
つらなはひもびのめめ  
一まやそのあまよ  
鬼といふ名のあらん

勸業林叶 卷五よ云  
江戸にて鬼ワ〜と云を  
東國又出雲迎 肥の長崎  
まて鬼〜と云興仙臺  
ほてあふ〜と云常陸よ  
鬼のさら〜と云とらり

○めら〜よとも月令廣義 五の  
打鬼戯いら小い  
鬼〜り通雅 卷三の替鬼  
撰の〜りのたひよとらり  
鬼といふ名あり和漢あひ似らり



○これら古画よめらど  
三国傳記の文の  
ありひきををたらしん  
とて今あらた  
ほ〜のたたる図あり

一柳斎筆





治承四年  
ヨリ今文  
化十年  
マデ凡  
六百三十  
四年と

長門本平家物語 卷九 治承四年 清盛入道福原よ在て夢よされぬと

あらしめられけり事をしる所よ入夜もまほしとされしをよらしめ給ふたこと  
人の目くらむをするやうなまじひよししうまもせむととみらまてとてしるる事

日蓮御書録内 報恩抄の上よ云 慈覚知證と日蓮とが傳教大師の所奉

よ不審申へ親よ値ての年ありとひ天よ値奉ての目くらむよとてい傳へ

ども云云 建治二年七月 太平記 卷十 建武二年十二月十一日 箱根竹下合戦

の條よ云 加様よ月くらむして鎌倉よ集り居る叶まら云云

異制庭訓往來 正月七日の消息の中に遊戯の名目をあてて目比頭引

膝扱云云 此目比頭引和二年の作るらん  
あふゆる徳ありと教へ別よあり されらるるらん

しよ奉のめしめふらまきをあらるべし此事の先板の巻よもどれどらら

らざればうらびらよ

○宿世焼 十四

異制庭訓

狂戯の名目をあててうららよ宿世結宿世焼」として名

目あり宿世結へ先板の巻よもつらつら今のせの縁結とて宿世

焼の事と考ふるよ増補越後名寄 著作 卷三十二よ云 正月十五日 左義

長の燃残りの本を宅の炉中よ焼其火よ縁結の餅焼と云奉と童

部共よと資の脹とすの品形を稱して具ど云云」としてこれ宿世焼の遺

意よあららる縁結のりら焼と稱するよとてやとあやゆ

異制庭訓を貞和二年の撰と決ひつらら今文化十年まてあつて四百六十八年をさる

○見世棚 十五

今のせよ商人の物賣所をたるよ見せともいふよ家の端よ棚閣

をまらけ其上よ万の賣物をたまさのて賣するゆきよたるよ名おと

まらその棚のりり物をたまあき往來の人よんせせて賣らんためよあまら

物るれば中古い見世棚ともいふ後のせよこれを作畧して見世と























○古画行灯挑灯  
 〇これりあし行灯とてあつまる  
 たるる蓋之今茶人のゆりたる  
 露地あんどんとゆりのた古制の  
 のこれるこれゆりたる

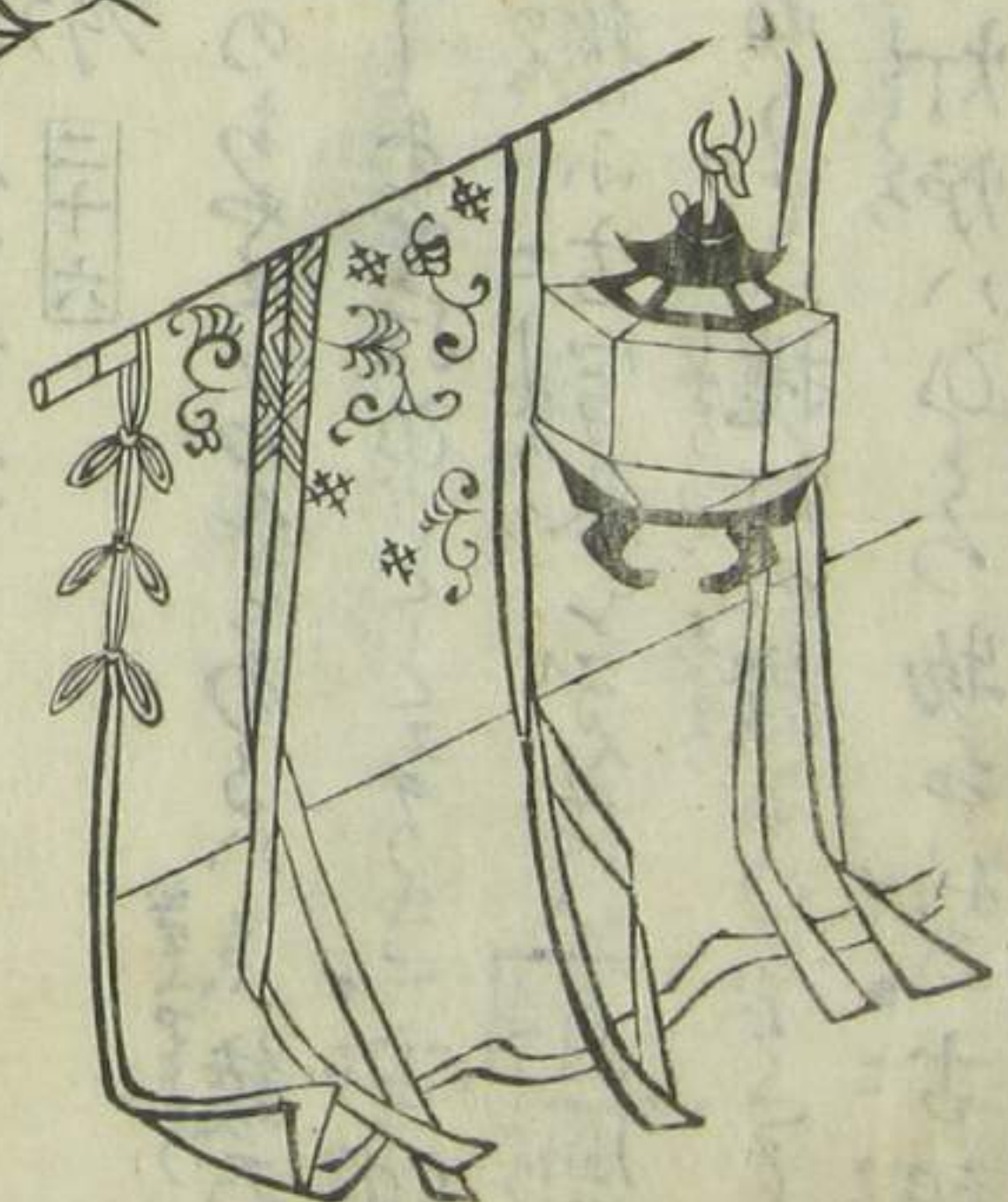
古画行灯挑灯

三十七

〇りあし挑灯とてあつまる  
 はたふひのゆりたる



燐洞



〇は二ツも  
 あんどん  
 ちんちん

右画是れ更之本あり  
 〇此の古画は不詳此行  
 燈は番所より  
 燈は老の羽の需  
 燈は一して  
 燈は昔幸  
 燈は同幸

出書各色華燈 軒豪家富室 則有料絲魚鮓云々  
 ハ豪富小あしづれば 得かこきわづれ 高價のおもるべし  
 ノ中ニ 魚鮓を載て 價低きものハ成器難得とあるもあつまる  
 爾雅十卷 釋魚の條下 魚枕の事 詳之 本草綱目 卷四 魚鮓の條下 諸魚  
 の腦骨を鮓とす といふ 此小渡り 鮓燈は 此ふて 魚腦の燈  
 炉とも 挑燈とも といふ 〇は二ツも  
 色正青云々 枕如琥珀 可以籠燈  
 形似鯉 而背青色 又頭中骨煮 拍之 可以製器  
 〇は二ツも  
 〇は二ツも  
 〇は二ツも

林逸節用器財門 魚腦石之  
 桂川地藏記 弘治二上卷 外魚腦  
 檀栳象牙引壺 頗黎卮瑠璃壺云々  
 〇は二ツも  
 〇は二ツも  
 〇は二ツも













たるものちなま下とつみへの質素のあざうらひをきりのあはれいさくら考つてくらへて  
 ひきのせり前の條は合せらるべし

○八月朝日姫氏雛圖



○九月九日髪葛子圖



伊勢桑名 公羽麻呂寫真

攝陽郡談卷十六ゆゑ「姫氏」  
 住吉郡遠里小野の田圃ふたつり  
 所とれ市店ふ出た多ハ堺道ふたつり  
 あり大さ鷺の卵のごとく色あざ  
 きりめて白くゆはれて人の面を  
 画がきそ幼童の翫とんあひひた  
 黄色あつもあり黄白ともふ  
 美麗とてふれて艶き形と  
 以て号は「と」のり此書ハ  
 元祿十四年印行せり  
 これらもそのまぢやく  
 ひらうらのひらをめてあをひ  
 たる澄之前のひらうらのまぢやく  
 引のせむハ筆のほのまぢやく  
 こふ筆

○桑名こらりあてハ  
 ひのお草を  
 わづ草と  
 いふとぞ

○中編前帙二卷標目

- 花むすひの考 ○唐土の鞆子ハ此の羽子れ子ふ似たる事 ○魚とととら再考
- きつと灯籠の考 ○獨樂の考同古圖とさぐ ○梓現寄絃口寄の考同
- 古圖 ○編笠の考古圖とさぐ ○端午れかざり花五月まのこの考同古圖
- 宗任ガ梅花の哥の考 ○朝夷名ガ鶴の紋の考 ○藤の考 ○編木摺門説
- 經の考同古圖 ○放下僧とさぐとあやめとあや竹の考同古圖 ○千駄橋
- の高人の古圖 ○せんト物賣の考同古圖 ○茶筥髪三里紙の考 ○女の髪
- の風古圖とさぐ ○せんト物并ふ文字入の文様の考古圖とさぐ ○目黒の
- ゆら花の再考 ○いゝやぐらふ玉 ○棚機とらの牛馬 ○尻おひ比丘尼 ○踊
- の古圖とさぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓おされ古圖 ○皿屋敷の考 ○手管と
- い詞ことばののこ ○椀久塚の考 同寄進きしんの圖 ○祇園ぎん梶女の肖像 ○友禪ゆぜん漆の

考 此外あまこあれどもいふ



